

『河をわたりて』論 ブラック・ダイアスポラと語られざる黒人体験

加 藤 恒 彦

『河をわたりて』(*Crossing the River*)¹⁾ は一見相互にバラバラに見える4つの作品をプロローグとエピローグがはさむ形になっている。個々の作品はそれぞれ独立しており単独で成立しうるものである。にもかかわらず、この作品が単なる作品集として扱われておらず、またわたし自身もそれが正しいと思うのは、個々の作品の独立性を超えた大きな意味が存在すると考えられるからである。

「あの河をわたったものたちへ」という冒頭の献辞がその意味について語っている。「あの河」とは何よりもポール・ギルロイがブラック・アトランティックと呼んだものである。ブラック・アトランティックとはアフリカ人が奴隷として新大陸に運ばれた「中間航路」であり、奴隷として、あるいは元奴隷として黒人がヨーロッパへあるいはアフリカへと再び超えた大西洋のことである。

フィリップスは奴隷貿易以来現在にいたるまでブラック・アトランティックを行き来するなかで新たな土地に根を下ろそうとした黒人たちにこの本を捧げているのである。だがそれは同時に白人の物語でもあった。フィリップスが「河」において奴隷船の船長の物語を一本の柱として描いているのは、そのようにして白人もまたブラックアトランティックをわたったからである。フィリップスは奴隷貿易の全盛時代における白人の船長がどのような意識でその職業に従事していたのかを歴史的、客観的な視点で描くことによって時代というものに規定された人間の怖さを描いているともいえる。

『河』に描かれている他の3本の物語は奴隷貿易と奴隷制の時代から第二次大戦時にわたる三人の黒人の、また黒人と白人の出会いの物語である。共通するのは黒人存在に歴史的に焼き付けられた恥辱の烙印ではあるが、だがそれは黒人存在と一言で片付けられるほど単純ではない個々人の特異な人生でもある。これまで黒人文学の伝統においてさまざまな黒人像が描かれてきたが、フィリップスは『河』において黒人史の壁にさらにわけいりこれまで語られなかった人生を生きた黒人たちの体験や黒人と白人との出会いを描き、黒人存在の歴史的多様性という概念を一層豊かなものにし歴史というものの奥深さをあらためて感じさせるとともに、黒人

というものを固定的、非歴史的に捉える傾向への批判ともなっているのである。

こうした観点を踏まえつつ、それらを四つの作品のそれぞれの独自のテーマ性を具体的にたちいて分析することがこの小論の課題である。フィリップスのテキストの豊かさははそのような仔細な分析への魅力的な誘惑となっているからである。

プロローグ

「プロローグ」はこの小説に登場する三人の黒人の人生のルーツを示している。あるアフリカ人の父親が、二人の息子と一人の娘を凶作のために「愚かにも」奴隷船に売り払ってしまったことが父親の回想という形で語られるのである。イタリックで語られる文章はその父親から三人の奴隷を買った奴隷船の船長の独白である。この船長の側からの物語が「河をわたりて」である。そして船長が買った「二人の強壯な少年と誇りたかい少女」(1)がナッシュ、トレビス、マーサであり、それぞれが独立した物語の主人公である。だがそれはアフリカに起源をもちながらも奴隷船によって北アメリカに連行された多くの黒人の比喩である。というのはそれぞれの作品にでてくる三人と同じ名前の登場人物は時代がかけ離れており同一人物では有り得ないからである。

父親もその意味では250年にわたって生きている存在としてアフリカを象徴しているといえよう。そしてこの小説はアフリカを父とするダイアスポラの物語であることが示されているのである。父親は「わたしは子供たちの暖かい肉体と交換に冷たいものを得て自分の手を汚してしまったのだ」(1)と語り、「恥ずべき取引だ」として「罪悪感」にさいなまれていることを告白する。

だが父親は子供たちを忘れてしまったわけではない。250年の間、父親はドラムによって風によって運ばれてくる「さまざまな言葉で歌われる合唱に耳を傾けてきた」(1)という。そしてその合唱のなかに父親は三人の子供たちの声を聞き分けるのである。父親は三人の人生を木のイメージで特徴づけている。すなわち「子供たちは折れた木の枝のようなものであるが、失われたのではない。子供たちはその体のなかに新しい木の種を宿しているからだ。そしてその木は硬い大地に期待を込めて根を下ろそうとするのである」(2)と語る。

父親の言葉を通じてフィリップスは厳しい現実のなかを未来を見つめながら生きのびる人々の姿を描くという作家的スタンスを示しているのである。

この物語は風にのりアフリカの岸にたどりついたドラムのリズムに合わせて歌われるダイアスポラの大合唱の一部なのである。

「異教の岸」(“The Pagan Coast”)

「異教の岸」は19世紀初頭から中盤にかけての「アメリカ殖民協会」によるアメリカ黒人のアフリカへの殖民推進運動を背景にした物語である。「アメリカ殖民協会」は奴隷制度には反対しながらも、黒人と白人が平等の関係でアメリカで共に生きる方向は否定したのである。とりわけ南部で展開された「アメリカ殖民協会」は南部の都市の自由黒人が黒人奴隷の反乱の誘引となることを恐れ、やっかい払いの意味でリベリアへと黒人を送ったのである。従って当時の奴隷制廃止論者たちは「アメリカ殖民協会」を批判した。たとえばフレデリック・ダグラスは次のように述べている。

・・・「アメリカ殖民協会」は偽善面を引っさげ、しゃしゃりいで、われわれの国外追放に新たな生命を与え、アメリカの人々にその計画を押し付けようとするのである。この永らく暖められた計画、つまり奴隷制度への脅威だと考えられた（自由）黒人を追い払おうという計画を推進するために北部でも南部でも新聞が創刊された。・・・それぞれの新聞は、「アメリカ殖民協会」が蒸気船に乗せてわれわれをアメリカから追い出すのを可能にする予算措置を政府に取らせようという点で共通している。明らかにこの団体はわれわれの難局を好機ととらえ、よからぬやからが黒人排撃騒ぎを引き起こすたびに異常に活動に駆り立てられるのである。「協会」はわれわれの不幸を遺憾に思うのではなく、むしろ歓喜するのである。というのはわれわれの不幸は白人と黒人が同じ大地の上で栄えることができないということを証明するからである²。

アメリカにおいて黒人が憲法上の権利を獲得する方向で奴隷制廃止運動を続けていたダグラスが「アメリカ殖民協会」を「偽善」的で、「黒人と白人が同じ大地の上で栄えることはできない」ので、「脅威となる」黒人の「追い出し」を図ろうとしている存在として捉えているのはきわめて当然のことといえよう。

この小説の一方の主人公 エドワードは「アメリカ殖民協会」の会員として自分の奴隷をアフリカに宣教活動に送り出した人物として位置づけられている。まず小説に描かれているエドワードの作家による素描を紹介しておこう。エドワードは1780年に裕福なタバコ栽培のプランターの息子として生まれる。29歳の時に300人の奴隷つきの財産を相続するが、同時に父親から奴隷制度への嫌悪を受け継ぎ、奴隷に読み書きを教育するという当時としてはまれな試みを行なう。そして「アメリカ殖民協会」の存在を知り、「奴隷所有者としての重荷から逃れる絶好の機会を見出す」(13)。彼のキリスト教の信念と奴隷制度は共存し得なかったのである。そこでエドワードは彼の奴隷のなかから見込みのある黒人を選び、キリスト教神学の大学にまで

行かせ、リベリアへの布教に送り込んでいたのである。

このような描き方からエドワードは同じ南部人でも自由黒人を「奴隷制度への脅威」と感じアフリカへの送還を計画した類の奴隷主ではなかったことが了解されよう。彼は奴隷に読み書きを教え、キリスト教を教えるために大学にまで送っているのであるから奴隷主としても異端であり、当時においてきわめて良心的でリベラルな白人であったと考えてよいだろう。

ナッシュはそのような元奴隷の一人であった。ナッシュは7年前にリベリアに向かったのであるが、多大な困難に耐えながらキリスト教のアフリカでの布教に邁進し、一人の人間としてはまれにみる成功を収め、地元の住民のみならず、数少ない現地の白人の尊敬を得ているという情報がエドワードの元に入っていた。ところがそのナッシュが一年少し前に突然、他者を介した一片の連絡のみで自ら消息をたってしまったのである。それはエドワードが妻エメリアの死の喪に服している時期のことであった。ナッシュはエドワードのそれまでのキリスト教徒としての信念の体現者であり、そのナッシュの失踪はエドワードをこれまで支えてきた信念をも揺るがしかねないものでもあった。

こうして、一人身となったエドワードはナッシュ失踪の原因を知るべくリベリアに向かうのである。

物語はナッシュの行方を捜すエドワードのアフリカへの旅と現地での行動の描写とナッシュから7年間の間にエドワードに送られたリベリアからの5通の手紙によって構成されている。

そこで書簡の分析を通してナッシュの7年間のアフリカでの生活において何が起きていたのかを整理してみることにする。

第一通

読者は1834年9月のナッシュのアフリカ到着直後の最初の手紙によって、かつての主人を父親のごとく敬愛し、エドワードから受けたキリスト教の教えに深く感謝し、信じていたナッシュが、最初アフリカの困難な気候・風土、マラリアの脅威、厳しい生活、キリスト教を信じていないアフリカの人々のなかでの困難な布教活動に自分の健康をもかえりみずまい進する姿を知ることができる。

この最初の手紙で注目すべき点が二点ある。一点はリベリアをナッシュはそのあらゆる困難な状況にもかかわらず、「ここでは黒人は自分の自由を享受できるのです。というのは皮膚の色による差別が存在せず、全ての人が自由で平等なのです」(18)と述べていることである。これは後の3通の手紙を通じて唯一変化しない点である。これは、この作品を理解し、さらにはナッシュの最終的な選択を理解する上での鍵となる。つまり当時の黒人を巡る歴史状況を示しているのである。

第二点目は、「働こうとせず、盗みによってやってゆこうとする（移民としてやってきた人々＝著者）はアフリカ人と同じようになりつつあります」（18）というナッシュの言葉からも推測できる「アフリカ人を怠け者であり、盗みを普通に行なう人々である」というナッシュのアフリカ人観が垣間見られることである。

第二通

最初の手紙から約1年後の1835年10月の手紙ではナッシュが首都のモンロビアから離れ本格的な布教のためにリベリアの内陸部に移り住みミッションスクールの地元への建設や農業の開始、妻と子供の死、農場を開き成功している移民との出会いが語られている。

ここではナッシュはほとんどの移民が住むモンロビアでの黒人たちの墮落について言及し、それに比較して田舎で農場を開き額に汗して働くかつての先輩の姿に感動した体験を語っている。そして内陸部での異教徒への布教活動のなかでこそ精神の健全さが保ちえるという確信を語っている。すなわちその活動のなかでこそ「キリスト教の布教活動の成果を観察でき、その成果はアメリカ的生活様式のアフリカにたいする優位性を顕著に示しているからです」と述べているのである。（27）ここではナッシュが、キリスト教文明＝アメリカ文明の優位性を信じ、アフリカ人の中での布教活動に生きがいを見出しているのがわかる。さらに、ナッシュが布教活動のなかで地元の言葉も苦労しながら学びはじめていくことへの言及もある。

ただ、手紙の冒頭の部分では、モンロビアを離れる前に出した3通の手紙が貴方には届いていないのではないかと述べている。つまりナッシュの手紙にたいし、エドワードからは一つの返信も届かなかったということである。しかしここではそういうことはよくあることだということに済まされている。

第三通

1839年8月の手紙ではエドワードから一通の手紙（エドワードが出した2通の手紙の一つであろう）が届いたことがわかる。だがナッシュはその手紙がそれまで自分が出した手紙にはまったく言及していないこと、そしてそのことにナッシュが思い悩んでいることがわかる。すなわち、返事がないのは手紙を受け取っていないか、返事に値しないと考えたかのどちらかだということである。

それだけではない。この手紙はナッシュが色々な意味で過渡期にあることを示している。ナッシュは一方では、アフリカを「暗黒の国」と考え、エドワードの妻のエメリアをアフリカ女性の目指すべきモデルとして賛美し、新しい場所に定住地を築き、ミッションスクールを開い

たとしている。つまり堅固なキリスト教信仰に支えられ、アメリカ文明を賛美していると考えられる。

しかし、アフリカの民俗宗教であるブードーについてのナッシュの次のような言及は彼のなかに生じつつある変化を示している。ナッシュは一面ではブードーを「迷信」と呼びながら、「村の大悪魔の男」が不審な死をとげた隣人の死の原因を暴き、死をもたらした者を裁く方法について「正義を行う上でかならずしも不正な方法だとは思えない」(31)と述べているのである。さらに地元のアフリカ人にたいするアメリカからの移民の非道な行いの例を挙げ、他方、アフリカ人に読み書きの必要を説くなかで、アフリカ人の刺繍や工芸品に現れている創意に着目し、神は白人と同様に彼らにも道理をさずけたのであり、その能力を活用しさえすれば白人と同様に読み書きもできるのだとアフリカ人を説得し「この白人は(ナッシュのこと=筆者)はもっともなことをいう」(32)と地元の人々にいわせているのである。そしてナッシュはアメリカからの移民の誰もがそのように地元の人に語るができずに流血の事態が生じているのを嘆いている。

そのようにナッシュがリベリアのアフリカ人の間に溶け込もうとするのは、「ここ以外にどこで有色人種は自由を享受することができるのか?」(32)という思いがあるからだ。そしてここリベリアではナッシュは「Mr.ナッシュ」と呼ばれていると誇らかに語っている。

もう一点、注目すべきことはナッシュと他の移民やミッション活動を行なう黒人たちとの間に溝が生まれてきていることである。ナッシュが布教活動を行っていたのは首都のモンロビアからはるか奥地に入ったところであった。そこに布教活動に参加するために一団の黒人移民がやってくるのだが、彼らは首都の周辺の布教活動の成果ばかりを誇示し田舎での布教に取り組むことの困難を理解しようとしないうばかりか、布教活動のなかで地元のアフリカ人の生活に入り込んで行くナッシュを批判し、ナッシュの地元の女性との関係に関する悪意に満ちた中傷を流したりしたのである。

だが、この手紙ではアメリカからやってきた黒人女性とともに辺境での布教活動に望みをかけていることも告げられ、その女性との結婚の予定についても語っている。

第四通

1840年10月の手紙は「どうしてあなたの気持ちがわたしに非情なままなのかわたしにはわかりません。そのことでわたしは苦しんでいます。でもしかたがありません。わたしはあなたを導くことはできないのですから」(38)とエドワードが返事をよこさないことによる苦しみを訴えている。

次にナッシュは自分がアフリカ人の女性と結婚したことを知らせ、その女性をアフリカ人女

性のなかで最高の女性であるとし、別の女性との間に生まれた子供の母としての役割をしっかりと果たしていると誉めている。そしてナッシュはその女性の家族の家長となっていることを示唆している。そしてナッシュは自分の子供にエドワードという名をつけたことを告げる。

ナッシュはこれまでもましてリベリアを愛していると繰り返す。さらにミッションスクールにやってくる生徒の数が激減し、いまや農業が自分の主な仕事になっているという。

二度エドワードが自分の手紙に返事をださないことや、アメリカの母の死を弔うために一度アメリカに帰りたいという願いをも無視していることに触れた後で、ナッシュは地元のアメリカー人との間の対立について語る。「文明の灯台としてのアメリカ、尊敬すべきもののすべての見本としてのアメリカに固執するものたちはわたしの家庭の状況に腹をたてている」(40) というのである。つまりナッシュがアフリカ人女性と結婚し、アフリカの生活スタイルに同化した生き方に反対しているのである。そしてナッシュはそういう人々から孤立してゆく。そしてもはやアメリカ的生活への賛美は見られない。

次にナッシュが報告しているのは奴隷船がアメリカの国旗に守られアフリカから奴隷を運んでいるという話題である。イギリスは1807年には奴隷貿易を禁止していた。そして1838年にはイギリス西インド諸島の奴隷制度を最終的に廃止している。そして奴隷貿易を行なう船舶をイギリスの軍艦は取り締まっていたのである。この手紙が出された1840年はその後であり、にもかかわらず、ナッシュの母国のアメリカが奴隷貿易に手を貸していたという事実にも怒りを感じているのである。

そして最後に再び「どうしてあなたはわたしを見捨てられたのですか？」(42) という十字架のキリストが神にたいしてつぶやいた言葉が繰り返される。実にこの手紙のなかでは三度もエドワードからの返事がないことへの嘆きとも恨みともつかない訴えがなされているのである。

第五通（最後の手紙）

ナッシュからの最後の手紙はそれから1年3ヶ月後の1842年1月に出されている。ナッシュは手紙の冒頭で、彼にとってのエドワードとのこの間の関係を「屈辱」的なものだとし、「かつて親しい間がらであったわたしをこのように残酷にも見捨てるとは、いったいわたしはあなたの感情を傷つけるような何をしたのでしょうか」(60) とエドワードをなじり、残りの手紙のなかでナッシュの生活と信念に訪れた大きな変化を物語っている。

今ではナッシュはアフリカ人女性と結婚しているのみならず、一夫多妻制を受け入れ、3人の妻をもち、その子供にアフリカの言語を教え、自らもアフリカの人々と自由に意思の伝達を行なうために学んでいるという。彼の妻は無学ではあるが、寛大な心と子の母としての役割を

立派に果たし、夫の必要にも応えてくれているという。

そしてナッシュにとってのリベリアは「黒人にとっては最もすばらしい国」(61)だという。たしかに貧困、飢餓、戦争や病気にさらされている国ではあるが、額に汗して働くことのできる国である。「われわれ黒人は充分長いあいだ抑圧されてきた。われわれはわれわれの権利を主張し、立場を堅持し、アメリカでは決して見つけることのできない自由への愛を感じる必要がある」(61)という。そしてリベリアは「わたしの魂を墮落させるどころか、目からうるこの落ちるような思いを体験させ、わたしのこれまでの人生をしっかりと支配してきた無知の衣服を脱ぎさる機会となったのである」(61-2)という。ここに至ってキリスト教とアメリカ文明の優位という思想が否定されているのである。大きな価値観の転換が生じているのがわかる。

ナッシュは今ではキリスト教の布教活動を放棄し、農民として作物を育てるだけの生活をしている。何故か。キリスト教のここでの布教は無益だという。というのはアフリカ人はキリスト教徒を装っても、実際に祈っているのはキリスト教の神ではなく、土着の神々なのだという。キリスト教は純粋な形では決してアフリカに根付くことはできない。「自然に生えるものを摘み取るしかない」(62)というのがナッシュの結論である。そしてナッシュは最後に「わたしはキリスト教の信仰を中止し、したがって自由にアフリカ人としての生活を選ぶのだ」(62)という。

最後にナッシュはエドワードとの関係に触れ、「何故あなたは自分の目的のためにわたしを利用し、そしてリベリアという天国に追放したのか？」(62)と問いかけている。「あなたへのわたしの信頼が破れたことは明らかです」(63)、あなたへの信頼は実を結んだが、放置しておいたために枯れはててしまったというのである。

ナッシュの物語の意味

このようなナッシュのリベリアでの物語をどう読めばよいのだろうか？

明確なことはこれがナッシュのなかでのアフリカやアフリカ人への見方のドラスチックな転換を柱としているということである。アフリカは最初暗黒の地であり、アメリカ文明やキリスト教によって文明化されねばならない土地でしかなかった。そこにはアフリカ人をなまけものとみる蔑視観があった。しかし、他面ではリベリアはナッシュにとって世界で唯一黒人が自由であり誇りをもって生きることのできる場所であった。この感情は唯一、リベリアにすむ中で変わらなかったばかりか、貧困や飢餓や戦争や病気という困難にもかかわらずますます深まってゆく感情であった。

おそらくナッシュのアフリカ観が変化してゆくのはアフリカ人と親しく交わるなかである。ナッシュはアフリカの工芸や刺繍の精緻なづくりに自分たちと同じ人間の能力や可能性を垣間

見たばかりでなく、一見、迷信としか思えないブードーのなかに知恵を見出したのである。またアフリカ人女性のなかに忠実で賢明な妻と母とを見出したのである。

したがって、この物語はアメリカ生まれの黒人がアメリカ的生活様式とキリスト教をアフリカに広めようとして逆にアフリカに同化してゆく過程を描き、アメリカ中心主義やキリスト教布教の根底にある野蛮と暗黒のアフリカという観念を批判したということができよう。

ナッシュのアフリカへの同化の真実

だが明らかにナッシュのアフリカへの同化の物語はエドワードとの苦渋に満ちた決別の過程とともに進行しているのである。ここからナッシュが「アフリカ人の生活を選ぶのは精神的な苦悩の結果に過ぎない」「ナッシュがリベリアを「パラダイス」と呼ぶのはうつろに聞こえる」とする見解もでてくるのである³⁾。

そのような見解の根底にはアメリカ文明のなかで育ち、教育を受けたナッシュがそもそもアフリカ文明に同化するという自体を信じられないことだという思い込みがあると考えられる。

だがこの見解は、黒人奴隷制度が存在し、かつそれを国家が保護しようとしていた当時のアメリカが黒人のナッシュにとってもっていた意味についての歴史的想像力を欠いている。それにたいし、ナッシュにとってアフリカはあらゆる物質的に不利で困難な条件にもかかわらず、黒人にとって世界で唯一精神的「自由」を享受できる場所であり、そこでこそどんなに苦勞が必要でも国を築きたいという願いをナッシュがもったとしてそれは不自然であろうか？このナッシュの言葉を素直に受け止めることができるのかどうか解釈の分かれ目となる。さらに書簡を通じて伝えられる、そうしたアフリカへの態度をもとにナッシュがアフリカの生活様式や人々の知恵や人間性について理解を深め、それに馴染んでゆく過程を素直に理解することができるのか、それとも強がりを受け止めるのかどうか解釈の違いにつながる。根本はナッシュが当時置かれていた歴史状況の理解、ナッシュのアメリカ文明への批判的意識をどう理解するのかという問題である。そしてエドワードの不実をナッシュがどうとらえたのかも、そのような文脈において理解する必要がある。エドワードはアメリカ文明とキリスト教の象徴でもあり墮ちた神となったのである。ナッシュの「リベリアというパラダイス」という言葉はその意味では「貴方から見ればアメリカはパラダイスかも知れませんが、わたしにとってはこのリベリアがパラダイスなのです」という皮肉の入り混じった言葉なのである。

歴史的にみたアメリカ黒人とアフリカ

では、このようなナッシュの生き方をどのように歴史的に位置づければよいのであろうか？ 実はナッシュの生き方を素直に受け入れにくい土壌にはナッシュのようなケースが少数派のなかでもさらに少数派であったからではないだろうか？ つまり大半の黒人はアメリカでの自由の獲得を望んでいたのである。だが黒人のなかにはアメリカで黒人が自由を獲得できることに絶望し、アフリカに自由の地を求め人々もいた。黒人民族主義の火銃の流れであり、『アンクルトムの小屋』の重要な登場人物の一人ジョージにもその傾向は描かれているし、実際の歴史においてはマーティン・ディレイニーが有名である。しかしナッシュの生き方はアフリカにアメリカでは得られなかった自由を求め黒人自身による国の建設をめざすという点でアフリカへの帰還を主張した当時のアメリカ黒人との一致はあるとしても、文化的同化をめざすという点で決定的に違っている。ディレイニーの場合、アメリカの文化、文明の優位という観念を疑わずアフリカに違和感をいだき二度とは訪れなかったのである。ましてやそこに定住し、アフリカ文化を理解しようとしたり、自分のなかに取り入れようとはせずアメリカ文化に基づく黒人の国家を建設しようとしたのであった。つまりアメリカ中心主義は疑われていないのである。

また重要なことにはディレイニーにはアフリカを訪れてもまたアメリカに帰る自由があった。だが一度、アフリカを定住の場と考えたナッシュにはもはやアメリカにもどるという選択はなかった。だがナッシュはその選択の余地のなさを絶望として捉えるのではなく、逆に自分をアメリカにつなぎとめてきたものに絶望し、積極的同化の道を選んだのである。ナッシュの物語はそのようなまれなアメリカ黒人の生き方を描いた点に意義がある。

エドワードの物語

だがエドワードのナッシュに対する不実（手紙に返事をださなかった）という問題は四通のナッシュの手紙を読者が読んだあとでどんでん返しに出会うのである。実はナッシュの切々たる手紙はエドワードにはそもそも着いていなかったのである。それはエドワードの妻がエドワードとナッシュの間にあったホモセクシュアル的關係に嫉妬し、ナッシュからの手紙を破棄していたからである。

しかし、そうだからといってエドワードがナッシュを見捨てたという非難を免れたわけではない。ある意味ではエドワードはアフリカに送った時点ですでにナッシュのことを忘れていたのである。そのことはアフリカ到着後、ナッシュが自分の健康をも省みず必死に布教活動に邁進しているのを聞き知ったエドワードが、ナッシュを諫めるために唯一送った手紙（そしてその手紙もエメリアのために届かなかったのだが）を紹介した文章の直後の作者によるコメント

に見出すことができる。すなわち「しかしながら再びエドワードがペンをとり諫めの言葉を綴る必要を引きおこすような」(11)ことは起きなかった、とさりげなく書かれている部分である。「諫める言葉を綴る必要」がなければ書かないという関係とは何であろうか？これは目下のものへの家父長的な言葉であるだけでなく、二人のホモセクシュアルの関係の文脈でとらえると、もはや醒めてしまった愛情の対象への冷たい言葉でもあるのだ。

エドワードのそのような冷たい態度とは対照的にナッシュは自分のリベリアでの生活のすべてをエドワードとわかちあいたいと思っていたのである。

それはナッシュの次ぎに別の黒人青年が現れエドワードの寵愛の対象となっていたからである。その意味でナッシュはエドワードの一時の恋の相手に過ぎなかったともいえよう。そう考えたとき、かりにナッシュの手紙がエドワードのもとに届いていてエドワードが返事を書いていたとしてもその手紙が決してナッシュの関心に応えるものとはなりえなかったことは明らかである。手紙が届かなかったという事実はその意味ではエドワードのナッシュへの本音を最も純粹に誤魔化しなく表現していたのである。

この物語はエドワードのナッシュやナッシュのような黒人への不実な態度のみを問題にしているのではない。エドワードは実は自分の妻をも裏切っていたのである。妻のアメリアはエドワードのナッシュへの溺愛に嫉妬し、その後エドワードが新たな黒人青年の恋人に耽溺する姿を非難し「もの笑いのたねになっている」(56)と訴えていたのである。しかしその言葉に耳を傾けるエドワードではなかった。そしてアメリアはついに家出し、錯乱の果てに自殺してしまったのである。ナッシュの失踪が伝わったのはその直後であった。妻とナッシュを同時に失うことによってエドワードは初めて自分の行為の意味を振り返ることになるのである。そこに生まれたのが「罪悪感」であった。ナッシュが送った手紙が自分のもとに届かず、したがって返事も書かなかったということによって自分がナッシュを苦しめていたということがエドワードのなかの「罪悪感」をより深めたことは明らかであろう。

エドワードの妻への態度の偽善性

しかし、エドワードのナッシュとアメリアに対する態度は基本的に違っていた。たしかにエドワードはアメリアにたいする自分のかつての愛情が色あせ、ナッシュに心に移すことによってアメリアを苦しめていることへの自己嫌悪に似た気持ちに悩まされていた。アフリカでエドワードがとらわれる悪夢の一つはアメリアの顔が「小さな池状のつぶれた腫れ物に覆われ、その膿にハエやなんか貪欲にたかっていた」(55)というイメージであった。これは妻への自分の仕打ちへの罪悪感の表れであろう。とは言え、エドワードの妻への基本的感情は「無関心」であり、妻が「自分を子供のように無条件に愛すること」(55)しか望んでいなかったのでは

る。妻の自殺に至る過程にたいし、エドワードはいかに自分には責任がないのかを自分にいいきかせている。すなわち、ナッシュからの手紙を彼女が破棄していたことは「エドワードにとってつらい経験であった。にもかかわらず、妻を許す心の寛大さが自分にはあったのではないか？」(56)とし、新たな黒人青年を溺愛するエドワードを妻が「あまりに過大な愛情を注ぎ、もの笑いのたねになっていると」(56)非難したときにも、家長としての自分への妻の行きすぎた言葉を許した自分の寛大さを強調し、その後、妻が家を出、錯乱し、自殺したことについてもエドワードは、「それを自分には責任のない悲劇であった」と考えているのである。(56)

だがエドワードが妻を非難しなかったのは寛大な心の故ではない。自分の側に非があったからこそ非難できなかったのである。そのかわりにエドワードが採ったスタンスは妻がとった行動の犠牲者に自分を祭り上げることである。エドワードのなかにはそのような複雑な大人としての計算とあまやかされたがゆえに自己中心的でわがままで移り気な子供が共存しているのである。

だがいくら自分のなかでエドワードが取り繕ろうとしても、妻のスキャンダラスな自殺は白人社会にも知れ渡りエドワードは白人社会から孤立することになった。

エドワードとナッシュ

ではナッシュにたいするエドワードの「罪悪感」をどのように捉えればよいのか。重要なことはアメリカへの態度とは異なり、ナッシュとのかかわりはより深くエドワード自身の生き方に関係していたといえよう。布教のために黒人を奴隷の状態から解放し、教育し、アフリカに送り込むという行いはエドワードの生き方の根幹だったのである。だがナッシュの失踪がその根幹を揺るがし、エドワードにその真相を知ろうとさせたことをすでに述べた。そしてアフリカにわたったエドワードは自分が送った黒人たちがアフリカで遭遇した困難を自らも体験し、そこに新たな感情、すなわち「新たな罪悪感」が生まれてくるのである。

エドワードはリベリアの首都モンロピアにたどり着き、ある酒場で「もと奴隷のナッシュの問題」に思いをはせる。すなわち「自分がナッシュのみならず、他の多くの奴隷をこの住みにくく、世界の果ての異教の地に追い払ってしまったことに心を悩ませたのである」(52)。そしてエドワードは「本当の意味では彼ら自身のものではない過去と歴史に取り組むよう奨励するという事業はおそらく間違っていたのだ」(52)と考える。そしてふと「アフリカ到着後の熱病も眠られぬ夜も、複雑な感情の起伏も深い罪悪感の表れに過ぎなかったのだ」(52)とエドワードは思うのである。

そしてその「罪悪感」をさらにつらさせるのはかつて自分の奴隷であったマディソンからナ

ッシュが熱病に倒れ、すでにこの世にはいないことを知ったことである。

ナッシュ・ウィリアムズ。農場から連れてきて屋敷に住ませた少年。自分の愛を勝ち得、自分の愛を存分に注がれた少年。自分にありとあらゆる苦しみと混乱をもたらし、そのことにアメリカがついには耐えられなくなってしまったその張本人。そのナッシュ・ウィリアムズはもうこの世にいないのだ。（58）

そしてエドワードの手元に残されたのはエドワードに直接渡すようにとナッシュからマディソンが依頼された最後の決別の手紙（第5通）であった。そしてその手紙を通じてエドワードはナッシュが7年の間にたどってきた心の軌跡を知るのである。ナッシュの最後の手紙を読んだエドワードはナッシュが死ぬ直前に住んでいた場所を訪れたいという思いに駆られる。

だがこの「罪悪感」はどのような性格のものであったのか？それをもっとも端的に示しているのが地元の白人たちが集まる家（実は「アメリカ殖民協会」の役員の屋敷）を始めて訪れたときに黒人のバトラーから用件を問われたときにエドワードが感じたかつて経験のない屈辱感である。

エドワードはこの経験が彼の心のなかにまきおこしたような敵意をかつて体験したことがなかった。黒人に何かを説明したりする経験などなかったからだ。（54）

ここに表れているのは黒人を対等、平等の人間ではなく、格下の人間としてしか見ない家父長的で人種主義的なエドワード以外の何者でもない。このような人種主義的感情をもつエドワードのナッシュへの「罪悪感」とは何であろうか？それは対等の人間としてのナッシュとの信頼関係を裏切ったという罪悪感ではなく、家父長的な温情の対象にたいする責任をまっとううできなかったという罪悪感である。ナッシュへのエドワードのかつての恋もそのような枠組みにおける寵愛であったといえよう。

ここで重要な役割を果たしているのがマディソンである。マディソンはかつてナッシュと同様にエドワードの気まぐれな愛情の対象であったが、エドワードに新たな寵愛の対象が生まれると、エドワードの気まぐれな性質を察知し、自分から身を引き、自分のプライドを守り、その後のエドワードの誘いにも乗らなかったのである。そして再びエドワードの前にでたときマディソンはアフリカ行きを自ら申し出、モンロビアでアメリカ人相手の商売を手がけていたのである。

エドワードがモンロビアに着いたとき彼が唯一頼ることのできたのはこのマディソンであった。かつての奴隷であり、自分が捨てたかつての恋人の世話にならないと何もできないという状況にあったエドワードであったが、マディソンはナッシュを探して欲しいというかつての主

人の要請に誠実に答える。そしてマディソンはエドワードをナッシュの最後の住みかに入れてゆく。

その旅の途中でエドワードが見たのは原住民と寝食をともにする生活を送っていたアメリカ入植者の生活、エドワードが「思ってみたこともないモンロピアの外の貧しい田舎の生活」であった。その「原始的な生活」に直面したエドワードはショックを受ける。

その晩、マディソンはエドワードがナッシュの死に場所を訪れる本当の理由を尋ねる。エドワードはナッシュの子供を「アメリカに連れ帰り文明化された人々の間で適切なキリスト教徒の生活を提供する」ことだと答える。しかしそれを聞いたマディソンは「顔をそむけ、何も答えない」。さらにエドワードはナッシュの子供たちは自分と一緒に帰るだろうか、ナッシュは一体何人の妻を本当はもっているのか、などと質問する。そして答えようとするマディソンをさえぎり、アメリカでの生活、奴隷とともに生きる生活に戻りたいと思う自分の感情を吐露するのである。そしてマディソンの手を握り、自分の感情を彼が共有することを求める。だが、マディソンは一言「ノー」と応えたのである。「その声は小さな小屋に響きわたり、その言葉の重みとそこにこめられた意思は外の自然の音を掻き消すほどのものであった」のである。

ここに描かれているのは元の主人とはまったく別の独自の価値観をもったマディソンの威厳ある姿である。いや単に別というのは不正確であろう。主人のアメリカ的、キリスト教的価値観を決して鵜呑みにしない、アフリカに根を下ろして生きるものとしての独自の価値観であり、明確に「ノー」といえる価値観である。ここに読者はすでに紹介したナッシュの価値観を投影してもよいであろう。マディソンは今では亡きナッシュの身代わりとしてこの物語に登場しているのでといってもいいのではないかと思う。

エドワードの「罪悪感」はアフリカという土地への否定的評価をもとにしている。そういう土地に送ったことが悪かったという感情なのである。それをアメリカ文明、キリスト教文明の絶対化といってもよいであろう。だがナッシュはアフリカに送られたことでエドワードから見捨てられたと考えていたわけでは決していない。このような価値観の対立がクライマックスに達するのが最後の場面である。

次の日の昼前にエドワードの一行はナッシュが最後に住んでいた場所にたどり着く。

どこをみわたしてもエドワードの目を原住民の姿が襲った。彼らは何をすることもなくしゃがみこみ、臀部でぎこちなく体を支えていた。その姿は幼稚な掘っ立て小屋と似通っていた。エドワードはかすかに慈悲深い微笑みを浮かべようとした。しかしこの惨めな住まいの光景にたいする嫌悪感という自分の本当の感情を隠すことができなかった。・・・彼らはナッシュ・ウイリアムズの住居の前に行んだ。マディソンは妻をふいた掘っ立て小屋を指さし、以前の主人になかに入るように促した。しかし、エドワードは嫌悪感で後ずさりした。異教徒たちからもきつと軽蔑されるようなこんな生活と馴染もうと

するとは一体ナッシュの心のなかで何が起きたのであろうか？・・・そしてエドワードは恐ろしい衝撃をもって気がついた。ナッシュは孤独だったのだ。ナッシュは見捨てられていたのだ。・・・エドワードは口を開き、悪臭にみちた空気を深く吸い込んだ。そして自分の悩める精神を静めるために賛美歌を口ずさもうとした。原住民たちは彼を眺めた。そして白人の唇が言葉を形作るのであるが、声にならない姿を眺めていた。それでもエドワードは自分の賛美歌を歌いつづけた。原住民たちはそれを眺め、どのような邪悪な精神がこの哀れな男の魂に住み着きこのような惨めな姿にまで引きずりおろしたのだろうかと考えた。自分の行き方と目的意識を失った哀れな同胞への憐憫の情で彼らの心は一杯になった。この奇妙な白人。マディスンは目をそむけた。（69 - 70）

エドワードは貧しい掘っ立て小屋を見て、そこに嫌悪の対象しか見いださなかった。そして「エドワードは恐ろしい衝撃をもって」「ナッシュは孤独だったのだ。ナッシュは見捨てられていた」からそのような生活を受け入れたと考える。ナッシュが孤独で見捨てられていた、というのはある意味では事実かも知れない。ナッシュの心の世界をすべて理解してくれる人間は彼の周りにはいず、そしてわかってくれると思っていた人間には見放されていたからである。しかしだからといって、それが理由でナッシュがリベリアを受け入れたとするのは論理の飛躍である。そしてそれはエドワードには理解不可能であった世界なのである。

エドワードがナッシュを理解できなかったのは、奴隷であったナッシュにとってアメリカが不自由な国であるという自明の事柄を理解できなかったからである。その不自由さはエドワードにとって受け入れがたいアフリカの貧困をさえ受け止め、そこで生きる決意をさせるほどのものであったのである。少なくとも、そこにはアメリカにはなかった自由や額に汗して生きる尊厳が、また地元の人々がエドワードに感じた「憐憫の情」にうかがわれる同胞への人間らしい感情が存在したのである。

フィリップスがエドワードのような白人を歴史のなかからとりだし描いたことは彼自身が述べているようにそれが現代的な意味をもっているからである。エドワードのたっていた前提や価値観を鋭く描いたフィリップスは多くの現代の読者に自分がよってたつ無意識の前提を批判的に吟味するという経験を通過させることになる。ここにこの作品の大事な意味のひとつが存在すると考える。

「西部」“West”

「西部」は『河』の二作目に位置する作品である。20ページばかりの小品ではあるが、控えめな表現で、心をうつマーサ・メイの一生が描かれている。

マーサはナッシュとともにアフリカから売られた三人の子供たちの一人である。とはいえ時

代は異なり19世紀の初頭から南北戦争後の時代のアメリカが背景となっている。マーサの人生は西へ西へと向かう人生であった。ヴァージニアの農園から主人の死とともに売られ、夫とも幼い娘のエリザ・メイとも離れ離れとなる。マーサを買ったホフマン夫婦は政府から土地を買い受け農場を開こうとしてカンザス州に移住する。しかし農場はたちゆかなくなりホフマン夫婦はカリフォルニアに向かうことになる。ホフマン氏は最初マーサを奴隷州に売ろうとするが落胆するマーサの姿を見て彼女を自由にする。マーサは奴隷州から遠ざかるうとしてさらに西に向かいドッジ・シティに定住し洗濯店を開く。まもなくチェスターという黒人の求愛を受け、レストランと洗濯店を開く。その間南北戦争が勃発し、そして解放されることになる。マーサの幸せはしかし10年間しか続かなかった。チェスターが無法者に殺されたのである。マーサは妹同然のルーシーとともにリーベンワースに移り洗濯店を始める。しかしまもなくルーシーは結婚相手を見つけカリフォルニアに去ってゆく。その後マーサはカリフォルニアに向かう黒人ばかりの幌馬車隊の一員となり自らもカリフォルニアに向かう。しかし老齢や旅の困難と病気のために旅の足手まといとなったマーサは2月のデンバー市に下ろされ路上で凍え死にしようになる。そんなマーサに一人の白人の女性が声をかけ、自分の所有する小屋に彼女を連れて行きベッドを提供する。だがストーブに火はなく割れた窓ガラスからは寒風が入り込む。翌朝、白人女性は死んでいるマーサを発見するのである。

これは物語の展開のなかで明らかにされるマーサの人生の素描である。フィリップスは物語の現在を最後のコロラドのデンバーの凍てつく夜に置く。そして誰も通らないデンバーの中央通りのある戸口にすわりこみ寒さをしのごうとするマーサの内面に寄り添いながら死をまじかにしたマーサの過去の回想と彼女に声をかけた白人の女性とのやりとりによって作品を構成しているのである。

フィリップの作家としての手腕は最初のページを半分も読まないうちに読者をマーサの内面に同化させる手腕に表れている。最初の一行はマーサを寒さに身をまるめ戸口にうずくまっている物のごとくに描く。だがその次の瞬間「今夜は雪になるのだろうか」とマーサは思った(73)という文章で読者はマーサという一人の人間の内面に引き寄せられる。しかも次の文章は意表をつく。「美しい」という言葉である。そしてマーサは空を見上げながら「白い雪よ、早くやってこい」(73)と思うのである。この言葉によって読者は寒さに凍える肉体とは異次元の精神的、内面的世界に誘いこまれるのである。そしてこの物語はその精神的・内面世界から見たマーサの人生の軌跡なのである。

次の行はある男が通りかかり路上にうずくまる彼女を見下ろすのだが、再び意表をつくのは「一瞬マーサは男が自分につばを吐きかけるかもしれないと思った。しかし男はそうはしなかった。だからここはコロラドなのだ」(73)という文章である。「自分につばを吐きかけるかも知れない」(73)という言葉のなかに、マーサがこれまでどのように扱われてきたのかが暗示

されている。だが男がそうはしなかったという事実によって今自分が「草原や砂漠を越えてたどり着こうとしていた土地」(73)に居ることにふと気づくのである。実は、マーサはカリフォルニアに向かう幌馬車隊の足でまといとなりこの町に置いて行かれ、今や人生の終わりを向かえようとしているのである。そして幌馬車隊の回想は、これまでのマーサの人生を逆にたどる心の動きを呼び起こし、アフリカの海岸にまで遡るのである。今や人生の旅路の最後にさしかかっていると思うマーサの感慨は「神よ、あなたは何故わたしをお見捨てになったのですか」(73)という言葉で表現される。ここで読者はエドワードに裏切られたナッシュの同じ表現を想起し、二人の人生をつなぎ合わせている共通性を印象づけられる。だがナッシュの旅路はアメリカからアフリカへの帰還であったが、マーサのそれはアメリカの南部から西へ、西へと進む旅である。それは何のためであるのか？それは「自分がその国には属していないと感ずることなしにその国の一員であると感じることのできる国を求めて」(74)である。しかしこれもまたナッシュがライベリアに求めたものであった。こうしてナッシュとマーサの人生の地理的移動は実は同じ衝動に基づいていたことがわかるのである。

このようにして最初のわずか1ページでフィリップスは、行き倒れとなり、他の場所では同情のかわりに軽蔑の対象となっていたであろう黒人の老婆の内面に読者を一体化させ、そのような彼女の人生の軌跡とそれを貫く願望とその結果を印象的に提示しさらに、その人生へのより立ち入った関心を掻き立てるのである。

マーサの人生の前半は他の奴隷たちの多くの体験と共通性をもっている。よい主人に恵まれ、夫と女兒をもうけたのであるが、その主人の死によって競売にかけられ夫と女兒から無理やり引き離されたのである。また母親としてエリザ・メイという幼い自分の娘に深い愛着をもち、いつも心にその娘のことを気に掛けているという点も共通している。

「西部」で描かれる黒人体験の新しさはそれがタイトルにもあるように西へ西へと最後にはカリフォルニアに向かうという点である。黒人の地理的移住といえ、これまで南部から北部への移住、さらにはカナダへの逃亡と決まっていた。黒人の西部開拓やカリフォルニアへの移住体験が注目されてきたのは80年代の後半以後のことである。カンザスの郊外の農場、無法の町ドッジ・シティ、カリフォルニアをめざし苦難に満ちた旅路をたどる黒人ばかりの幌馬車隊など、これまでの黒人文学には描かれたことのない経験が取上げられている。だがそこに貫かれているのは「これまでよりもましな土地、いつも後ろを振り返り誰か悪いことを自分にしはしないだろうかと危惧することのない土地、自分が『ボーイ』や『おばさん』と呼ばれることの無い土地」(74)を求める願望である。

だが自由以上にマーサの体験に深く流れているのは愛を求める願望である。ヴァージニアの農園から売られカンザスに移住するマーサは「もはや夫も娘もいない。でも二人を失ったという記憶は鮮明だった」(78)。マーサを買ったホフマン夫婦は教育があり、また信仰にあつ

た。「孤独にさいなまれ、家族もなしに中年の域に迫りつつあった」(79) マーサのことを気遣いホフマン夫妻は信仰復興集会に連れてゆく。だが「マーサには宗教に慰めを見出すことはできなかった」(79)。「マーサ自身の個人的な惨めさと比べてみたとき神の子の苦しみにも共感できなかった」(79)。しかしドッジ・シティではチェスターという黒人に愛されマーサは10年の間やっと幸せな生活を送ることができた。しかしそれもつかの間の幸せでしかなかった。いかさまを指摘された四人の男のうち一人が銃を抜いたためチェスターはその男を迎え撃ち殺してしまった。そしてその後、残った三人の男が復讐のために再びマーサがやっているレストランを訪れ、チェスターの帰りを待つのである。奴隷解放令をマーサが聞いたのはこのドッジシティにおいてであった。だが「彼女が生活にそれまでよりも満足していたのは、解放のためというわけではなく、わたしにチェスターがいるため」(84)であった。そのチェスターをマーサは失ったのである。「一つの人生のなかにそんなに多くの惨めさ」(85)をどうして耐え忍ばねばならないのか、マーサは自問するのである。マーサの人生はその意味で愛するものを奴隷であるがゆえに、そして西部の不法によって奪われた人生である。

姉妹同様の友人であったルーシーがチェスターを失ったマーサを支えるがやがてルーシーも結婚相手の男性とカリフォルニアに去ってゆくことになる。マーサは老齢による仕事の疲れに病気が重なって一人では生きてゆくのが困難になっていた。しかしルーシーを「良心の呵責なしに旅立たせるのだ」(86-7)と心に決めたマーサは自分の体の不調を隠しとおし、そんな自分を見つめ「静かに一人で笑うのであった」(87)。

だがルーシーのカリフォルニアへの移住はマーサの心のなかにも「カリフォルニアをめざそうという思いが芽生える。そして失った娘、エリザ・メイも「もしかしたら西に向かったかも知れない」という思いが生まれる。マーサがカリフォルニアに向かう黒人の幌馬車隊の男と出会ったのはそのようなときであった。マーサは無理を承知でその一員に加えてもらうのである。そしてそれを許されたマーサは娘に会えるかもしれないという期待で「青春のエネルギーが再び体内に湧き上がる」(89)のを感じる。そして「本当の自由を味わい、大切な技術を修得し、まじめでまともな社会的地位を得ようという夢をもって」(93)しかしマーサは厳しい旅には耐えられなかった。一行は彼女をデンバーの街中に下ろしてゆくことを余儀なくされる。マーサはそれを決してうらまない。彼らは「勇敢な黒人のパイオニア」だったのであり、「この老いばれは黒人女を引き受け、役立たずの荷物みたいに置き去りにすることはなかった」(92)と考えるのである。

「凍てつく二月の夜明けまえ」マーサは目を開く。すると「ある夢が心に浮かんでくる」(92)それは自分一人でカリフォルニアにたどり着き、娘のエリザ・メイに出迎えられる夢である。エリザ・メイは今では「それなりの社会的地位を得た頑丈で背の高い黒人女性」(92)となっている。そしてエリザ・メイはマーサを自分の家族が住む家に連れてゆくのである。そ

こには学校の先生をしている夫と三人の子供たちがいる。やがて時間がきてマーサはたちさるうとするが、娘はマーサが東に戻ってはいけないという。マーサももう二度と東に戻ることははいやである。年若い、病魔に襲われたマーサは娘の本以外のどこにも行きたくなかったのだ。そして孫たちのまえてマーサは思わず泣き出してしまふのである。

フィリップは命を引き取ったマーサに「マーサメイは今日は洗濯物を引き受けない。洗濯板やアイロンを扱うこともない」(94)とねぎらいの言葉を付け加えている。

ここでマーサに声をかけた白人の女性のこの物語における存在について触れておく必要がある。男が無関心に通り過ぎたのとは対照的にこの女性は「身寄りはいないのですか？」と声を掛けたのである。そして「立てますか」と近くの自分が所有する小屋にまで連れて行き、ベッドを提供するのである。ストーブの火をつけようとするがうまくいかずあきらめ、しばしベッドに腰をかけてマーサと時を過ごし、次の朝死んでいるマーサを発見するのである。

この女性は「グレイの髪の毛」や「金のネックレス」から判断して老齢のそれなりの社会的地位のある女性と想像される。心の温かい女性である。だがこの白人女性にはマーサの心のなかや、それまでの人生を窺い知ることはできない。小さな、年をとって、一人では歩くこともできない、行き倒れの名前も知らない身寄りのない黒人の女性という以上に知るよしもないのである。フィリップスはいわばこの心温かい白人の女性にマーサ・メイの人生を語っているのかも知れない。フィリップスの語りによって白人女性にとっての「他者」がその過去と内面をもった一人の人間「マーサ・メイ」となるのである。

「河をわたりて」(“Crossing the River”)

「河をわたりて」は『河をわたりて』の第三話であり、本書のタイトルと同名の物語である。

「河」は著者が冒頭の謝辞で述べているように、ジョン・ニュートンの『奴隷貿易者の日記』という18世紀の文献に触発されたものである。ではフィリップスがモデルとしたというジョン・ニュートン(1725-1807)とはどのような人物であったのか⁴⁾。ジョン・ニュートンは極めて数奇な人生を送った人物である。第一に、奴隷船の船長を父にもち、自らも奴隷船の船長として二回の航海に従事しながらその後牧師となり、奴隷貿易廃止運動に参加し、奴隷貿易廃止論者として有名なウイルバークフォースとも近い関係をもち、議会で奴隷貿易が廃止されたのを聞いてこの世を去ったといういわば生き方の180度転換を経験したのである。第二に、その数奇さは奴隷船の船長になるまでのニュートンの人生の波乱万丈さに表れている。

ジョン・ニュートンは父の影響もあり、幼いころから船乗りの生活を送っていたのだが、14歳のときに英国海軍の軍艦の乗組員として拉致され下積みの船員としての労働を強制される。

何度か脱走を試みるが沿岸警備隊によって逮捕され、厳しく屈辱的な鞭打ちの懲罰に耐える。しかし奴隷船の乗組員との交換でやっと軍務をとかれ、奴隷貿易で大きな成功を収めたクロウという男のパートナーとなり一獲千金を目指す。しかしアフリカの奥地で奴隷商人からだまされたあげくクロウを欺いたという濡れ衣を着せられ、一転し、クロウの奴隷にされ虐待を受ける。しかし父親に書いた手紙によって窮地を救われ、イギリスに戻る。ニュートンが初めて神の声を聞いたのは台風にまきこまれたイギリスへの困難な航路の最中である。ニュートンはその後、一等航海士として奴隷船に乗り組む。そのなかで自分がかつて奴隷として扱ったクロウに再会するが奴隷船に積み込まれる黒人奴隷を見て初めて「もし自分の肌の色が黒かったならば、自分が彼らの立場にいるのかも知れない」(74)と気づき「自分が船長になったときには乗組員にたいしてと同様に奴隷にたいしてもやさしくしよう」(74)と考えたという。船長としての最初の航海のなかでニュートンは、赤子をかかえる黒人女性からその子を引き離し、海中に投げ捨てた船長の話聞き身の毛がよだつ思いをする。しかし奴隷船の船長としてニュートンは他の船長と同様の義務を果たさねばならなかった。「奴隷制は何の疑問もなく生活の一部として受け入れられていたのであり」(78)、ニュートンは「自分の行為が正しいとか間違っているとかと問いただすことはなかった」(78)のである。だがニュートンのなかには他の奴隷船の船長とは違った感性が存在した。黒人奴隷を消耗品としてしか考えない他の船長とは異なり、ニュートンは奴隷としてこれから西インド諸島に売られてゆき、平均9年しかもたないといわれている奴隷たちを見ながら、あたかも自分がその黒人たちを殺す手助けをしているのではないかと感じたのである。そして「キリストは自分、ジョン・ニュートンのためだけではなく、そのような黒人たちのためにも十字架の上で死んだのではなかったかと」(79)考えたのである。

ニュートンの他の船長との違いは彼の恋愛観のなかにも表れている。ニュートンには幼い頃から恋焦がれているメアリーという幼馴染の娘がいた。彼は長年にわたる海上での生活の間もメアリーのことを片時も忘れず、アフリカからの帰還の際にその娘を訪れ求婚する。しかしニュートンにとってショックであったのはメアリーが奴隷貿易を嫌っていることであった。しかしその時ニュートンは「黒人奴隷はわれわれと同じ人間ではないのだ」(68)と反論する。その後、メアリーはニュートンの求婚を受け入れ二人は結婚する。ニュートンは二度の航海の後、心臓発作で倒れ、船長の職を引退することになる。30歳のことである。そして残りの生涯を英国教会の牧師として過ごすことを決意し、奴隷貿易廃止運動のたかまりとともに牧師としてそれに参加するのである。

そのような数奇なニュートンの人生のなかからフィリップスはニュートンの船長としての最初の航海のみを対象に描いている。それもアフリカ西海岸で奴隷を購入し、西インドに向けて出航するまでの期間である。時期的には1752年の8月末から次の年の5月の末までの航海であ

り、それは奴隷貿易がイギリスにおける奴隷貿易廃止運動の高まりにより廃止になる1807年（それはニュートンの没年でもあった）から半世紀以上前のことである。それは奴隷貿易が大きな利益をあげ、「立派な商売」（68）としてイギリス社会において認知されていた時期のことである。

「河」は、基本的には船長の航海日誌という体裁をとり、それに船長のイギリスに残した新妻への二通の手紙が挿入されている。フィリップスが描いているのは奴隷船の船長の航海日誌や手紙から浮かびあがってくるものとしての奴隷貿易の実態であるが、重要なことは、それが後に奴隷貿易に反対することになるニュートンという人物の視点から描かれていることである。つまり奴隷貿易が「立派なビジネス」であると社会的に認められた時代に、そのことを基本的には疑いを持たないながらも、背景として自らも拉致され虐待を受けたのみならず奴隷体験をもち、航海で九死に一生を得た数奇な体験のなかでキリスト教に目覚めつつあり、かつ女性を一筋に愛する心をもったニュートンという人物の見た奴隷貿易がどのようなものであるのかがテーマなのである。

ビジネスとしての奴隷貿易

船長のジェームズ・ハミルトンは若干26歳の、いわゆる2世船長である。父親はその業績において世間から高い評価を受けており、そうした父親を息子は愛し、大きな誇りとし、2年前にアフリカで亡くなった父の後を継いでこの航海にでているのである。この点、他の分野のビジネスを引き継いだ2世事業主となんらかわりはない。ハミルトンの事業の特殊性は扱う商品が人間であるという点である。船でアフリカの黄金海岸方面に向かい、そこでアフリカ黒人を商品として買付け、それを中間航路を経てアメリカへ運び、カリブであれば砂糖と交換し、この航海に投資している船主に利益をもたらすことであり、船長として航海の安全と乗組員の安全に責任をもつことである。

ハミルトンの仕事はアフリカの西海岸に沿って南下しつつ、奴隷をまず仕入れることである。だがそのためには船をまずアフリカにまで安全に到着させねばならない。リバプールを8月末に出航し、シエラレオーネに着いたのが10月13日となっているから約1ヶ月半の航海をへてやっとアフリカに到着している。その間もそれ以後も航海日誌には悪天候、雷雨、嵐、強風、不利な潮流の流れ等自然の脅威に翻弄される日々への言及が続く。ビジネスとして非常にリスクの大きい商売であることがわかるのである。事実、大嵐の最中ある老齢の船長は死去している。

しかも出航から1ヶ月もしないうちに酒を盗む船員も発覚する。船長は裁きを与え、罰する。つまり船の乗組員の規律を保ち、それを破ったものは厳しく罰することも船長の仕事である。

しかし乗組員の間規律を保つこと自体決して生易しいことではない。とりわけハミルトンの場合、親の七光りのおかげで26歳という年齢でその地位を得たに過ぎないと思われ古参の乗組員の反感を買っており、船長に反抗し、規律を乱したりするものもでてくる。船長はそういう連中を規則にしたがって厳しく罰するのだが、やがて反乱の企てが起き危うく船を乗っ取られかけるのである。このような乗組員の内部での不穏な動きや脱走などさまざまな動きに航海の間ずっと船長は神経をすり減らすのである。

アフリカにやっとのことで到着したのち、船長としての使命はできるだけ質のいい黒人奴隷をできるだけ安く、必要なだけ（船に載せることができるだけ）確保することである。ハミルトンが黒人を徹底して商品として考えていることが航海日誌の記述からよくわかる。黒人はアメリカのプランテーションでの奴隷労働の担い手としての質という観点から評価されている。年老いたもの、体に欠陥のあるものはダメである。健康で、強壮な成人男子がまず求められ、次には女性が、次には黒人の青年が、子どもが一番最後にくる。それが購入時の年齢、性別に基づく人数比に表されている。

船長が黒人に関心をよせるのは何よりもその交換価値においてである。個々の取引はまずい取引であったのか、お買い得であったのか、として判断される。

ハミルトンの悩みの種は黒人奴隷の相場の高騰である。奴隷一人当たりの値段が以前の時代の4倍に跳ね上がっているのである。奴隷の単価の値上がりによってアフリカでの買値とアメリカでの売値との間にあまり差がなくなっているという指摘は重要である。随所に他の奴隷貿易船との奴隷の確保を巡る競争が生じており、お互いに相手を出し抜こうとしている姿も垣間見ることができる。競争の激化が奴隷の単価の高騰を生み、ビジネスとしての存在意義（利潤の獲得）を危うくしている現実を見ることができよう。もし奴隷貿易から、それにまつわるさまざまな危険ややっかいごとにもかかわらず利益がほとんど望めないとしたらそれを続けることはビジネスとして割りに合わないことになる。

もう一つの関心事は必要な数の奴隷の確保である。必要数は奴隷船の収容能力によって規定されている。船長の手腕は安くて、質のよい奴隷を必要な数だけ確保することであり、そのためにはどこの海岸に行けばそのような必要をもっともよく満たせるのかについての情報が必要である。また現地の奴隷調達人の白人との協力関係、信頼関係も不可欠である。だが必要な情報を得るのも簡単なことではない。何故ならばしばしば情報源となる同業者（他船の船長）は競争環境のなかで意図的に虚偽の情報を流すことがあるからだ。

ともあれ購買によって仕事が終わるわけではない。アメリカに運送する途中での商品の損失をいかに防ぐのが問題である。航海日誌には毎日、一人か二人の奴隷が熱病に冒され、下血して死んでゆく事実が綿々と書きつけてある。その原因は現地で蔓延している疫病であったり、イギリスから運んできて古くなった食物であったりするのだが、原因がどうであれ、これは利

益という観点からの大きな損失であり防がなくてはならないのである。

死んでゆくのは奴隷だけではない。乗組員自体が次々と病気に倒れてゆく。

もうひとつビジネスという観点から船長を悩ますのは奴隷の反抗や反乱の危険である。アフリカ近海へ到着直後の10月14日、船長はある船が奴隷の反乱にあい乗組員が全員殺害されたというニュースを他の船長から知る。2月にも奴隷と乗組員の双方に大きな被害者を出した船中での奴隷反乱のニュースを知る。買入れた奴隷の数が増大するにつれて船長は、反乱の企てが無益であることを知らせるために船内にバリケードを築き、背後に6丁の銃をすえる。このような予防策にもかかわらず、船長は4月に入り反乱の試みが自分の船のなかでも進行していたことを知る。買入れた奴隷たちが密かに鉄の枷を外そうとしていたことが判明し、拷問の上、反乱計画の全貌を聞き出すのである。だが奴隷の反抗は収まらない。自ら海に飛び込み死を選ぶものもいるし、いよいよアメリカに向けて出航した直後に再び30人ほどの男の奴隷の反乱計画が発覚する。彼らはすでに鉄の枷を外していたのである。このような奴隷の反乱は船長からすればビジネスの根底を覆す企てであるのみならず、船長自身の命の危険にかかわるものである。船中での反乱を記した航海日誌の部分は「210名というそこそこの数の奴隷しか買ってはいないとはいえ依然として私の命は危機にさらされている」(124)という言葉が見られる。

以上が航海日誌から伺われる奴隷貿易の実態である。そこから言えることは船長にとっての奴隷貿易は、徹底してビジネスという言説の内部に閉じ込められているということである。商品としての奴隷、資本化されたものとしての奴隷が描かれるのである。そのような過程に働いているのは黒人という商品から最大限の利潤を引き出すための努力であり工夫である。これを資本主義的合理主義と呼ぶことができよう。

資本主義的合理主義においてはアフリカ人の人間としての次元は完全に無視され不可視化されている。したがって人間を売り買いするという道徳的問題も問われることがない。資本主義的合理主義そのものには道徳的次元が欠落している。これが航海日誌から得られる最大の結論である。

だが皮肉なことに、道徳的配慮からではなく、資本主義的合理性の観点からの奴隷貿易への反対は可能であった。船長の日誌のなかで奴隷の価格の高騰による奴隷貿易の収益性の減少を悩みの種としているところを紹介したが、その実例である。だが資本主義的合理主義の立場以外からの奴隷貿易への批判は船長には理解できない。

船中での奴隷の反乱はそのような批判のひとつである。反乱は奴隷による人間の商品化への抗議である。しかし船長にはビジネスの攪乱要因として、そして自分の命への脅威としか映らない。それは何故なのか？それは船長の意識に内在する人種主義に原因がある。船長がそもそも奴隷貿易を一つのビジネスとして冷静にとらえ、商品としての黒人という観点に徹することができたのは、ハミルトンには黒人にたいする「深い嫌悪の感情」があったからである。そ

のため船長にはアフリカ人の内面に入り込み、その感情や思考を共有し、同じ人間としての共感の働く余地があらかじめ排除されているのである。

だがそのことはハミルトンの人格の高潔性と矛盾しないという点がこの作品の興味深い点である。ハミルトンの手紙を特徴づけているのは、彼が妻に示す深い高潔な愛情である。そしてその愛情と妻から愛されているという自信ゆえにハミルトンは自分の従事しているビジネスにまつわる困難にも耐えていけたのである。ハミルトンは、船長としての業務でさえ「あなたへのわたしの愛と比べれば『些末な事柄』に過ぎない」(108)とまで断言している。何故ならハミルトンにとって妻との出会いと二人の愛以外にこれまでの人生で本当に楽しかったことは何もなく、ただ惨めさや苦痛の連続であったから、と述べているのである。ハミルトンがどのような人生をこれまで送ってきたかという点について小説は何も触れていない。だがすでに紹介したジョン・ニュートンの若いころの数奇かつ試練に満ちた人生を補って考えれば納得できる。この点でハミルトンは女性をつかのまの快楽の対象としてしか見ていない同業者たちと明確に異なっている。そしてそれゆえハミルトンは同業者から「一人の女の奴隷」(109)だとして軽蔑されている。

ハミルトンが一人の女性をそのように愛することができるというのは何を語っているのだろうか？それはミルトンは感性的世界、物質的世界の価値を越えた精神的内面的世界をもっているということである。その内面の投影が単なる肉欲を超えた妻への愛として現れているのである。それを高潔な精神と呼ぶならば、そのような高潔な精神を持つ人間をも奴隷貿易に引き込むことがありえたこと、そしてそれを可能にしたものが黒人への人種主義の蔓延とそれを土台としたこの当時における奴隷貿易のビジネスとしての正当性であったということではなかろうか？だが船上でのハミルトンは孤独であった。唯一、ハミルトンが妻への自分の感情を打ち明けることができたのは二等航海士のフォスターという人物のみであった。だがそのフォスター氏もこの世を去ってしまったと二通目の手紙でハミルトンは妻に語っている。ビジネスという共通性を除いて人間としての感性や価値観においてこの業界においてハミルトンは当然のことながら孤立していたのである。

レントはハミルトンが「感情的な硬直性をもっており、したがって他者の立場について感じるものが出来ない」⁵⁾としているのは黒人を人間として認識していない1752年という時代を無視した発言になっているのではないかと思われる。ちなみにイギリスで奴隷貿易反対の声が始めて上がったのが1750年代の末のことであり、それが大運動にもりあがったのは80年代のことである⁶⁾。したがってハミルトンが黒人の立場や感情を理解せず、ビジネスライクに淡々と黒人を扱っていることを彼の道徳的欠陥として非難することはこのような歴史的観点を欠落させていると思われる。

しかし二通目の手紙では奴隷貿易の道徳的意味がはじめて問われている。ハミルトンは、か

つて父親のために仲買人役をしていたエリスというイギリス人の奴隷商人とある海岸で出会い、奴隷船の船長であった尊敬する父親の知られざる側面に直面したのである。

父親は2年前その近くで不慮の死を遂げていたのであるが、父親を愛し、尊敬していたハミルトンはエリスに父が無くなった場所への案内を求めるのであるが、エリスは言葉を濁し、いくら頼んでも案内しようとはしない。手紙にはそれまで見られなかった一種の不安や焦りに満ちた切迫感があふれてくる。次の引用はエリスとハミルトンのやりとりである。

エリス氏は、父上は賢明な取引をなされず、あまりに激しく取引をされたのです、と応えます。さらにエリスは、お父上はこれは商売なのだという冷静さのかわりに、自分のもとにいる哀れなものたちに激しい憎しみをもたれたのですといい、わたしにも、そのようなことはなされないようにと示唆し、そしてそれ以上いくら頼んでも口を開こうしないのです。

そこでわたしは、父上の死に場所を見せることはあなたのキリスト教徒としての義務ではありませんか、といったのです。しかしエリス氏は、あなたの名前がキリスト教徒との間には何らかの関係をもっているという考えをわたしは軽蔑しますと応えたのです。そしてわたしは、正直いってそれに反論できなかったのです。というのは父は生前、神の教えと自分が選んだ職業は相容れないと信じ、この相容れないものを一つにくっつけようとするのはおろかなことである、といていたからです。しかし父上は、自分の死を運命づけたとエリス氏が指摘するこの憎しみについては何もわたしに語らなかったのです。わたしもまた黒人に深い嫌悪感を感じることがあると白状しなくてはなりませんが、でも憎しみという言葉はわたしの自然な感情を言い表すものとしてはあまりにきつ過ぎます。というのはこのような職業にずっと従事することと熱心な信仰とが両立しないのと同じように、一つの心が愛と憎しみという対立しあう感情を持ち続けることはできないからです。ですから父上の心は最後の運命的な航海に臨むときにはさぞかし冷酷になっていたか、二つにはっきりと分裂していたのでしょうか。

エリス氏は私が若すぎて真相を理解できないと考えているのでしょうか。(118 - 9)

ここでハミルトンは初めて自分の従事している奴隷貿易というビジネスの道徳的性格にキリスト教徒という立場から直面しているのである。きっかけはハミルトンが「父上の死に場所を見せることはあなたのキリスト教徒としての義務ではありませんか」とエリス氏を問詰めたことである。それにたいしエリス氏は「あなたがキリスト教の信者であるなどといってほしくない」と切り返すのである。そしてそれにハミルトンは反論できなかった。何故ならかつて父親が述べていた「奴隷貿易とよきクリスチャンであることとは両立しない」という言葉を思い出したからである。つまりハミルトンは自分もキリスト教の道に外れた道を歩んでいると自覚したのである。

そして長く奴隷貿易に従事するなかで父親はクリスチャンの愛の道から遠く離れ、黒人への

憎しみに踏み込み、その憎しみゆえに破綻したのだとハミルトンは推測する。それにたいしハミルトンは自分が黒人に「深い嫌悪感」こそもっているとはいえ、「憎しみ」という言葉はあまりに強烈過ぎると感じるのである。

だが彼の父親への愛と尊敬の念はこの後も変わらない。ハミルトンの父への評価を支えるのは「エリス氏の言葉にもかかわらず亡き父上の名声は確固としており高まりつつある」(120)という世間の評価なのである。世間とは奴隷貿易の業者なかまのことであろう。だがそれはハミルトンが心の底では軽蔑している連中のことである。結局ハミルトンが心の支えとするのは愛する妻との生活なのである。

ここに見られるのは物質的利益の追求と愛の追求という二つの世界へのハミルトンの心の分裂である。いわばビジネスマンと詩人が同居しているのである。ハミルトンは前者に由来する苦痛、困難、危険、孤独を後者によって耐えしんでゆくのである。父親の不可解な死に関する体験はハミルトンの心の二元的分裂にどのような意味をもたらしたのであろうか？すでに上に見たように、ハミルトンは奴隷貿易とキリスト教の道徳が両立しがたく、奴隷貿易の世界に徹底すればするほど（それは同業者の世界での名声につながる）父親の心が非情なものに硬化していったという論理に気付いている。だがハミルトンは父とは明らかに異なった精神的資質や要求をもっている。ハミルトンには船長として奴隷貿易というビジネスへの責任感はあるが、奴隷貿易を通じた富への貪欲な欲望はどこにも見られない。フィリップスはハミルトンのそのような心の分裂を微妙な筆致で描きだし、牧師として、また奴隷貿易廃止論者としての後のニュートンの展開を暗示しているのである。

「イングランドのどこかで」(“Somewhere in England”)

「イングランド」は一転して時代を20世紀に移し、第二次世界大戦を間にはさんだ時代のイギリスの片田舎を主な舞台にしている。主人公ジョイスは工場で働く女性であったが、孤独な独身生活と母との息のつまるような生活から逃れるために愛のない結婚を選び、片田舎にやってきて食料品店で夫のレンと店をやることになる。だがやがてその結婚生活は事実上破綻する。また戦中の物資不足のなかで闇市に食料を流していたかどでレンは投獄されジョイスは一人店を守ることとなる。そこに連合軍としてイギリスにやってきた米軍が駐屯することになり、ジョイスは黒人兵トレビスとであい、恋をして子供を身ごもる。しかしトレビスは戦争末期にイタリア戦線で戦死し、ジョイスは乳飲み子をかかえて一人生きてゆかねばならなくなる。逡巡ののちにジョイスは生きてゆくために子供を人手に手放す。18年後息子は今や家庭の主婦となったジョイスを訪れる。

フィリップスはそのようなジョイスの人生を彼女の日記を通して描くという手法をとって

る。だが日記は経年的に並べられているのではない。ジョイスとトレビスの物語を主軸にしなが
ら、それに至るまでのジョイスの過去を織り交ぜて描く方法をとっている。すなわち、日記
は米軍の片田舎への駐留にはじまりジョイスの黒人米兵トレビスとの出会いと愛の物語をたど
りながら、他方ではレンとの結婚に遡り、さらにはジョイスを結婚にかりたてた背景としての
母とのアンビバラントな関係、工場での人間関係、旅回りの俳優との恋と捨てられた体験、そ
れに続く結婚とその破綻の過程を描いているのである。つまりトレビスとの恋愛の流れが、ジ
ョイスの決して幸せではなかった過去の掘り起こしと交互に描かれ、したがって二つの流れが
同時進行しながら過去が現在への伴奏となり、過去の不幸な物語の連続がトレビスとの幸せな
出会いを対照的に照らし出すのである。

『河をわたりて』全体のなかで見ると、「イングランド」はイギリスの白人女性の視点から
アメリカの黒人男性との恋を描いている点に特徴がある。アメリカでは白人女性と黒人男性と
のそのような関係が決して許されなかった時代である。だが当時のイギリスにおいて黒人への
差別がなかったわけではない。戦後のカリブからの大量の黒人移民へのイギリス社会の差別的
反応によってイギリス社会も決して黒人への差別と無縁ではないことはすでに別論で明らかに
した。

そのような社会状況のなかでイギリス女性とカリブの移民男性との間に恋愛関係が盛んであ
り、それがイギリス男性の反発を呼び起こし、人種暴動の原因ともなったのである。Sam
Selvon の *Lonely Londoners*⁷⁾ はカリブからの黒人男性とイギリスの白人女性の間の恋愛関係を
沢山描いているが、フィリップスはセルボンが描いた時代より一時代前の時代を背景にアメリ
カ黒人男性との愛を、一人のイギリス女性の内面によりそいながら深く描いている。Selvonが
描いたイギリス女性とカリブ移民の男性との関係の多くは下層のイギリス人女性の黒人男性へ
のエクゾチックな性的関心に基づくものが多かったが、フィリップスが描いている関係はそれ
とは異なって、より内面的必然性、精神的な絆によって支えられたものである。そしてそれは
イギリスの片田舎でジョイスが感じていた孤独と孤立を埋めるものでもあったのである。だが
ジョイスの孤独と孤立は誇り高い孤独と孤立であった。いいかえればジョイスの孤独と孤立の
背景にはイギリスの片田舎の偏狭さと偽善にたいする軽蔑があったのである。社会の周辺に追
いやられた女性が選び取った存在がトレビスであったのである。

ジョイスとその母親

主人公ジョイスは聡明でしっかりとした自立心をもった労働者階級の女性である。美貌に恵
まれていたわけではないが、読書が好きで向学心も旺盛であった。父は第一次大戦でなくなり

母一人、子一人の母子家庭で育ったのである。母と娘との間には愛情が存在したがそれは二人の人生観の対立のゆえに屈折させられ母の娘への頑固なまでの無関心と娘の母への反発という形をとっていた。母は失意の人生を生きてゆく力をキリスト教の信仰の狭い世界に求め、娘はそれに反発したのである。その反発はしばしば聖書ではなく本を読みふけるという行為によって表現された。そういう娘にたいし母親は大学にさえ進学したいという娘の希望をくじき14歳で学校を中退させ工場で働かせたのである。そのようなジョイスが職場の娘たちのなかで孤立し、孤独な思いをするのも当然であった。ジョイスは非社会的でシャイな娘だと思われていたのであった。だが心のなかでは鋭くまわりの人間を見抜き、かつ自分の感じ方を客観的に見直す思考力をもっていたのである。

ジョイスの初恋と妊娠、母親との乖離

そのようなジョイスは旅回りの役者ハーバートと恋に陥る。18歳の時であった。二人はよく芝居のあとパブで時を過ごした。ハーバートはジョイスがシャイクスピア、ワーズワース、コールリッジを読んでいることに驚き、演劇について語ったのである。ジョイスにとってそれは日常生活とは異なった新鮮な世界であった。ハーバートの求愛に18歳のジョイスはそれを拒むことができなかった。

ハーバートとの間に子供を身ごもりどうしていいかわからずただ泣きくれるジョイスに母親は彼女の部屋にあわててやってくる。しかし母親が口にしたのは「本を持っていないのを見るのは久しぶりだね」(193)という皮肉だけであった。そしてジョイスが妊娠しているのを知ると冷たく部屋から立ち去ったのである。墮胎のあと母親がジョイスに進めたのはキリストに帰依することであった。しかしジョイスに宗教は無縁であった。そしてキリストを拒絶したことによってジョイスは母との関係を最終的に断ち切ってしまったのである。

他方、ジョイスが子供を身ごもるにいたってハーバートは姿を消してしまっていた。ジョイスはロンドンまでハーバートを追いかけて会うが彼には妻子があったことを知る。

ジョイスの結婚とその破綻の過程

それからジョイスは工場をやめ食料品の問屋で販売係の職を得る。だが彼女はその職がいやだった。そして母親には決して内心を打ち明けまいとしていた。本も何故読んでいるのかわらなくなっていた。レンに会ったのはそのようなときであった。食料品店をやっていた彼が仕入れにやってくる、やがてジョイスに目をつけ求愛したのである。そして母親は娘の結婚への無関心を徹底して装い、無視するのであった。

だがジョイスとレンの関係は後の破綻を予感させる兆候をいくつももっていた。知的なジョイスはレンの無知を見抜いていて、彼の考えていることを「本でも読むように」理解することができた。レンは自己中心的で本当のところはジョイスに関心をもっているわけではなかった。30歳になりこのままでは結婚できないと焦っていたのである。大きな声で笑う下品なところがあり、最初のキスのときからジョイスは気にいらなかったのである。

新婚旅行でウエールズにレンの車で行ったときホテルで金持ちの女性たちと遭遇するのだが、興味深いのはジョイスがその女性たちの自分へのまなざしを意識し、相手に映る自分とレンの違いを見ていることである。ジョイスは「わたしが嫉妬しているのをあのひとたちは知っていると思う」（141）反面、その女性たちがジョイスに我知らず親近感をもち会釈するのに好感をもつ。つまりその金持ちの女性たちは知的・精神的な面ではジョイスを同じ世界に住む存在として無意識のうちに認めていたのである。だが女性たちがレンを見ると目をそむけるのにジョイスは気付いている。上流階級の女性から見たレンは別世界の男なのである。新婚旅行の途中でレンは道に迷い頼りにならない姿を露呈するが、ジョイスのいうことには「バカな女が何をいうのか」（142）といった態度で無視しようとする。また親切に一夜の宿を貸してくれた婦人にたいし、レンは無神経な振る舞いをしジョイスに恥ずかしい思いをさせる。

ジョイスは新婚旅行のあと「荒涼とし、くだらないけれど、うぬぼれ根性だけはもっている小さな村」（150）に落ち着き、「なんてところだろう」と思う。唯一の気晴らしといえば町に住む母親を訪れることであったが、その母親といえば娘に罪悪感を抱かせることを人生の唯一の関心事と心得ているようである。そしてジョイスはそれだけは断固として拒否しようとしていたのである。

このようななかでジョイスは村で唯一の話友達とであう。夫を戦場に送り出し、幼子を育てているサンドラである。しかしサンドラと話をしながらもジョイスはレンとの結婚生活のことを考えている。サンドラは結婚前にレンの店で働いていたのであるが、ジョイスは「レンはサンドラがいなくなった穴を埋めるために自分に求愛したのだろうか」「店をやってくれる女を見つけ安心してパブに飲みにいけるために今は幸せなのだ」（153）とか考えてしまうのである。つまりジョイスは夫に愛され、大事にされているという思いをもつことができないのである。レンは誰一人として村の人々をジョイスに紹介もしなかったのである。他方、サンドラは夫を送り出し、生まれたばかりの子供をかかえ孤独感にさいなまれている。二人は格好の話友達になるのだった。

しかしサンドラはある日妊娠していることをジョイスに打ち明ける。だがジョイスはそれにはたいして何もいわない。相手が誰かとも聞かない。心のなかで「相手がレンであってくれたら」と心のいじけた部分で思う。だったら自分はレンから別れられるのに、ということだろうか？だが相手はレンの友達だった。ジョイスはサンドラにどんな男だか説明を受けなくともその男

について自分なりの判断はもっている。ジョイスはサンドラに皮肉な態度しかとれない。馬鹿げた行為だという思いがあるのだろう。「あの人はトミーによくしてくれたのよ」(157), というサンドラに、相手の下心に気付かないはずはないでしょ, という意味の皮肉をついいてしまう。妊娠しないように「何かをつかうべきだった」というサンドラの言葉にもつい「そう自制心をね」といってしまうのだ。だが夫の留守の間に子供を妊娠してしまったサンドラの状況は悲惨である。ジョイスはサンドラに、夫に自分なりの言い方で事実を伝えておいて、それで二人の関係がどうなるのが見てみなさい, とアドバイスする。だがサンドラはそれができないまま、戦場から休暇で帰ってきて妻が妊娠しているのを知って激昂した夫に撃ち殺される。ジョイスはサンドラの死に大きなショックをうける。さみしさから体を安易に許したサンドラへの苛立ちもあるが、「戦争から帰ってきて妻を殺す」(169)というサンドラの夫への怒り、そして何よりもジョイスが怒りを感じたのはサンドラの不倫の相手がこの事件後も何事もなかったかのようにすごっていて、しかもそれがレンの友達だということだった。ジョイスは普段は近づかないレンの行き着けの酒場に顔をだす。それは「サンドラの夫が本当は殺すべきだった相手」(170)がレンと酒を飲んでいたのである。そして「何か飲むかい」という夫にたいし「飲まないわ。あなたがこんな卑劣な男といっしょに飲んでいる限りはね」(170)といいはなつ。そんなジョイスをレンはベルトでしばきあげたいと感じるのがジョイスにもわかる。家に帰り寝床についたジョイスはそのような夫がもう二度と自分の体に触れて欲しくないと思う。

サンドラの孤独につけいり、体だけを目当てに近づき、サンドラの死にも何事もなかったように振舞う男が夫の友達であり、夫がその男の側についているという事実ジョイスは夫との精神的な溝を感じ、夫には心を許すことができないと思うのである(「夫に泣いているところなど見られたくない」(171))

ある日、ジョイスはレンに両親のことを話して欲しいという。母親が空襲によってなくなった後のことである。レンはめずらしく語り始めるが、いまにも泣き出すかと思われるところで自制し、席をたちパブに行ってしまう。そのときジョイスは「わたしたちは結婚など本当のところしていなかったし、お互いのことも知らなかったし、信頼もしていなかった」(197)と思うのである。

ジョイスとレンとの関係が最終的に破綻するのはレンが戦中の物資難のなかで、闇市に手をだし、警察につかまることによってである。ジョイスは夫が逮捕され連れてゆかれるのを見てむしろ「心のなかの何か重しのようなものが取り除かれる」(199)のを感じホットする。しかしレンが犯した罪のためにジョイスは村人から白い目で見られる。だがジョイスは「わたしは彼に加担したのではない」という思いをもち、じっとそれに耐える。そして夫が帰ってきた後に別々の人生を歩もうと決意するのである。

アメリカ駐留軍が村にやってきたのはそれから1年半ほど後の1942年6月のことであった。

トレビスとの出会いと恋愛

レンが逮捕されたあとジョイスは村人の中で「招かれざるよそ者」(129)となり、またレンの罪ゆえにその妻として「好奇の目」、「非難めいた」眼差しで見つめられる。ジョイスの店にやってくる地元の人々はレンがいなくなってジョイスが「寂しい」思いをしていると思っている。だがジョイスは村人のなかで孤立しながらも、一人で夕方パブの片隅でビールを飲みながら夏の夕日を眺め「長い夏の日々を楽しんでいた」(136)のである。

他方、村人たちのなかで駐留米軍を歓迎するものは誰もいない。厄介事が起きるのを恐れたり、米軍を傲慢だと感じたりするが、米軍が地元の住民とあまり接触するのではなく自分たちだけでやっているのを見て安心する。

ある日、米軍の将校が黒人兵のことでジョイスの店にやってくる。「連中の多くは我々に対等に扱われるのに慣れていませんので、連中の反応に驚かないようにしてください」(145)というのである。「我々」という将校の言葉にはジョイスが含まれている。つまり国籍を超えて白人対黒人という範疇で将校はジョイスに話したのである。さらに将校は「教育もちゃんと受けていなくて、ここの習慣になれるのに時間もかかるでしょうから、なにとぞ我慢のほどを」(145)というのである。だがジョイスはその将校のことを「うぬぼれの強いくだらないやつ」としか思わない。「仲間の兵隊について影で悪口をいったりして」と思うのである。(145)人種的に線を引く将校にたいし、ジョイスは「仲間の兵隊」という言葉でとらえているのである。

それからある日曜日、ジョイスは教会の前になっていた。木々の葉がちょっとした風でハラハラと落ち、寒風ふきすさぶ寒い冬の到来を予感させる日であった。ジョイスが襟をたてその場を離れようとした瞬間だった。黒人兵の歌声（ゴスペル）が始まったのである。黒人兵のものだとわかったのは、そんな歌いかたを村では誰もしなかったからである。それは心のこもった歌だった。ジョイスはたまたま犬の散歩にでていて初めてそんな歌声を聞いた老人と二人きりで耳を傾けるのであった。

しばらくして二人の黒人兵がジョイスの店にやってきて礼儀正しく彼女を米軍キャンプないのダンスに誘う。ジョイスはその週の間、自分がダンスに着て行けるような服を一着ももっていないことに無意識のうちに悩まされ、鏡の前で顔のしわを気にする。キャンプの門のところでジョイスは結婚指輪をはずす。ダンスが行なわれるホールに入り、招待された他のイギリス女性たちの所に行ったジョイスは反対側の米兵のなかに黒人兵の悪口をいいに店にやってきた将校を認める。その将校は彼女に手を振るがジョイスはその将校をじっと見つめつつ無視し、

そうできたことを誇りに思う。やがてバンドの音楽が始まると、どうしていのかわからないイギリス女性のなかで一人ジョイスは自分を誘ってくれた二人の黒人兵の所にゆき背の高いほうの男性と踊り始めるのである。こうしてジョイスはダンス・パーティーの口火を切ったのである。ジョイスはその背の高い黒人兵に「君はこの村の他のイギリス女性とはどこか振舞いが違うね」(163)とささやかれ、「それを言って欲しかったのだと」内心微笑むのである。

ジョイスは人種の壁をつくらうとする白人将校を軽蔑し、黒人兵の歌のなかに精神的な美しさ、心を動かすものを見、ダンス・パーティーで大胆にも口火を切って黒人兵を選ぶことによって村人に挑戦したのである。

次の日の朝、ジョイスはその黒人兵のことを考えるようになる。そして彼が店にやってこないことのでがっかりしながらも、来ることを当然と考える自分の気持ちを抑える。だがその黒人兵がある日曜日、水仙を手に店を訪れるとそんな気分はふっとぶ。

ジョイスはこの機会を逃してはと日曜日のデートを取り決める。それは母の墓をお参りすることに決めている第一日曜日であった。そこでジョイスは黒人兵を町のお墓に連れて行くことにする。町へ行くバスをまっ待っていると村人が通りかかるが彼女に誰も声をかけない。ジョイスはそのことを気にする。トレビスが黒人だからではなく、村人の自分の問題なのだと伝えたいと思うが、まだ時期尚早だと考える。ジョイスは彼の感情を気遣っているのである。バスのなかで二人は話す。ジョイスは自分がアメリカ人や黒人のことを知らないのじゃべればきっと間違っただけをいうだろうと聞くことに徹する。墓参りでは黒人兵はもってきた花をささげ、ジョイスに断った上でお祈りの言葉を述べる。町には見るどころなどないと正直にいうと黒人兵は町を歩きなが話だけでよいという。ジョイスは人々の視線が気になる。人々はジョイスを見つめているのである。「おまえはただ遊ばれているだけだ」(202)という視線である。ジョイスは腹がたち「自分をなにさまだと思っているのだろう」と感じる。「こんなひどいことをしてなんになんと思っているのだろう」とジョイスはますます腹が絶つ。黒人兵はジョイスが何か腹をたてているのに気づきぎこちなくなる。ジョイスは「あなたが悪いのではまったくくないのよ」(203)という気持ちを伝えようとして彼の腕に手をまわし、映画に誘う。映画を見ていてもジョイスはさっきの思いで映画に集中できない。そしてそのことを彼も気付いている。しかしどう自分の気持ちを伝えたらよいのかジョイスにはわからない。映画館からでて帰りのバスがないことに気付く。トレビスの門限が1時間後に迫っている。そうこうするうちに憲兵がジープでやってきて二人を拾う。ジョイスは「面倒なことに彼を巻き込んでしまった」(203)と思う。

その後黒人兵は3週間店に顔を見せない。ある日、やってきた例の将校に黒人兵は処罰されたのかを聞く。将校は驚きの表情を見せながらも「そうです」と答え、ジョイスが「それは彼のせいではなく悪いのはわたしなのだ」(205)というがとりあわず、さってゆく。ジョイスは

店を早めに閉め、その足でキャンプにゆき強引に司令官との面会を求め、黒人兵には罪がないことを主張する。彼女の行動はキャンプと村の両方の話題となり注目を引く。

黒人兵がふたたびジョイスの店を訪れる。ジョイスはおもわず喜びの声をあげてしまう。

例の日のことについて話しているとある老婆が店を訪れ、二人は黙る。老婆がさったあと、会話の調子は変化する。黒人兵は声を落とし、ジョイスがキャンプにやってきてくれたことを感謝する。するとジョイスは店を閉めることにし、看板をうらがえし、戸口の掛け金を閉める。これで黒人兵はリラックスし、当日憲兵に暴行を受け、逆に泥酔していて逮捕に抵抗したという理由で独房に入れられたことを話す。ジョイスはショックを受けるが黒人兵はあたりまえのこのように話す。そして軍隊は掃除やつまらぬ仕事しかやらせてもらえないという。ジョイスは彼をパブに誘う。彼のことにしてもっと知りたかったのだ。そうしないとビックリしてまた間違いしつづけるにと思ったのだ。彼は一緒にいって問題はないのかと尋ねる。ジョイスは「当然よ」と答え、彼をつれてゆく。お茶の時間で通りにも店にも人はいず、アメリカ人好きの店主が快く迎えてくれる。ジョイスは片隅にある窓際のいつもの席に彼を案内し、「ここから夕日が見えるのよ」(208)という。

ジョイスがその黒人兵のことをトレビスという名で呼ぶようになるのはこの場面からである。二人の関係の質的深まりがそのことによって暗示されている。ジョイスがトレビスにたいする不当な人種的扱いに抗議し独房から救い出すことによってジョイスは偏見から自由な心と正義感とトレビスへの思いを表現し、トレビスもそれに答えることによって二人の間には男女としてのつながりと人間的連帯意識が生まれているのである。フィリップスは、レンが逮捕されたあとパブの片隅でジョイスが一人で夕日が落ちるのを眺めていたと描いていたが、この場面ではジョイスがトレビスとともに夕日を見ることになったと描くことによって、ジョイスの人生に生まれた喜びを表現している。

パブのあとジョイスはトレビスを店の二階の部屋に連れてゆく。言葉すくないながらも二人はくつろいでいる。やがてトレビスが兵舎に帰る時間になる。トレビスは「僕の故郷が家族の写真をみせたかな」(209)と尋ねる。ジョイスは「それは身も知らぬ他人にいてその後忘れてしまうような言葉ではない」とジョイスは思う。この男はそんな男じゃない、と思う。ジョイスは彼を送ろうかというが、憲兵に会うかもしれないとトレビスは手を差し出す。その手をジョイスは思わず握りしめてしまう。トレビスが去ったあと、彼のいいにおいが部屋にただよっている。ジョイスは窓を開けない限り、また一人になることはない、と思うのである。

だが次の月になるとイタリアのムッソリーニが逮捕され、アメリカ軍がその後の掃討作戦でイタリアに派遣されることになるだろうとパブの主人はジョイスにいう。それを聞いてジョイスは「心(211)のドアが開まるような感じがする」。ジョイスはトレビスとの別れに直面するのである。ジョイスは突然、化粧品がいかに入手困難になっているのかを問題に感じる。そし

て「香りのいい石鹸のためには人でも殺せる」(211)と感ずるのである。

レンが刑務所から帰ってくる。レンはトレビスとジョイスの関係を知っているのだがまだ彼女に未練をもっている。彼女を「だらしのない女」と悪態をつき、トレビスのことを「あんな連中とつき合うべきじゃない。バカを見るのはおまえだぞ」(214)と人種的偏見をあからさまにし、自分といっしょに北部のほうにゆくようにという。しかし、刑務所には行って妻のわたしに「バカを見させた」自分のことを棚にあげて、とジョイスは思う。そしてレンとの結婚は名目だけのものにしかすぎないときっぱりという。するとレンは暴力をふるい、自分の意見を押し付けようとする。しかしジョイスは引かず、沈黙をもって答える。やがて罪悪感にとらわれながらレンはパブに向かう。

ジョイスはそのあと急いでパブに向かう。ジョイスはレンとトレビスがそこで鉢合わせするだろうと思ったのである。だがジョイスはどうしようというのか？ジョイスはパブにつくと夫のしているまえてトレビスが仲間と飲んでいる場所にゆき彼の側に座る。彼女の顔を見たトレビスとその友達は矢継ぎ早に何が起きたのか質問する。ジョイスは事情を伝えるとトレビスの手に触れ、これは「わかれの言葉なのだ」(215)と心に思う。そして送ろうというトレビスを断り一人で家に帰る。

この場面でジョイスがとった行動は二人の男性に自分の気持ちがあることを明らかにし、同時に結婚している以上、トレビスをそれ以上巻き込むつもりがないことを明らかにしたのである。

だが事態はそれで終わらなかった。レンは酔ってジョイスに暴力を振るうのである。しかしある晩、ジョイスに暴力を振っているところにトレビスがやってきてレンを殴り倒す。すると黒人のトレビスへの汚い言葉がレンの口からでてくるのをジョイスは聞く。トレビスは、これ以上ジョイスに手をかけると承知しないぞという。そしてレンは虚勢をはって強がるのだが、ジョイスのことを本当には愛していないのでジョイスには何もいわないのである。このことがあってレンは別れることに同意し、北部にさってゆく。店は彼女が切り盛りし、儲けの一部をレンはちゃっかりと受け取る約束をする。そして別れ際、レンは「お前は白人種への裏切りものだし、俺に関する限りありふれた尻軽女に過ぎないし、村の皆もそう思っている」(217)と言い放つのである。

ジョイスがレンと別れたあとトレビスはジョイスに結婚を申し込む。だがアメリカで一緒に住むことはできないことを知らせる。白人と黒人の結婚は当時アメリカでは認められなかったのである。やがてジョイスは妊娠する。だがトレビスはイタリア戦線に送られることになる。戦況を知らせるニュース映画でトレビスの姿を探すが黒人兵は写されていない。妊娠したジョイスは神経衰弱に陥る。そんな彼女のところにトレビスは三日間だけ休暇をもらって帰ってくる。結婚するためである。アメリカに連れて帰らないという条件で上官から許可をもらったの

である。停車場に降り立ったトレビスは戦争で憔悴しきっている。だが迎えにきたジョイスとその大きくなったお腹を見ると駆け寄ってきて「ジョイス」と叫ぶ。この時ジョイスは自分が求められていることを実感する。だがトレビスは終戦をまじかに、子供の顔をみることもなく戦死してしまったのだ。

終戦とともに帰ってきたレンに店を譲り、身寄りもなく、金もなく乳飲み子をかかえていたジョイスは新たな人生を始めるために涙をのんで区役所に子供をゆだねることにする。やがてジョイスはアランと出会い結婚する。そのときにジョイスはトレビスとの思い出はすべて焼いてしまう。

1963年、トレビスとの間に生まれた息子グリアーが今や子供をかかえ主婦となっているジョイスを突然訪れる場面で終わっている。

このようにして「イギリス」は知的的好奇心と偏見にとらわれぬ寛大な心、そして誇りの高さゆえに、偏狭で人種の偏見をぬぐえない片田舎の生活によって疎外された一人の女性がアメリカの黒人兵のなかに心のよりどころを見出す物語である。フィリップスは読者をジョイスに一体化させることによってイギリス社会の良心に訴えているのである。

注

- 1) *Crossing the River*, Caryl Phillips, Vintage Books, 1993,なお本書からの引用のうち比較的長いものは、その該当ページを（ ）の中に記入した。
- 2) *Life and Times of Frederic Douglass*, Frederic Douglass, 1892. なお本論では1962年のCollier Books版299ページから引用した。
- 3) Bénédicte Ledent, *Caryl Phillips*, Manchester University Press, 2002, p. 128.
- 4) 小論でのニュートンについての伝記的事実は*Slave Ship Captain: Story of John Newton*, Carolyn Scott, Luttherworth Press, 1971.から得た。本書からの引用にはその該当ページを（ ）の中に記した。
- 5) *ibid.*, p. 123.
- 6) *Black Personalities in the Era of the Slave Trade*, Paul Edward and James Walvin, The Macmillan Press LTD, 1983, p. 47.
- 7) Selvon, A. *The Lonely Londoners*, Essex, Long man, 1956.

A Study of *Crossing the River*: the Untold Black Diaspora Experiences

This article aims at a close reading of one of Caryl phillips' masterpieces, *Crossing the River*, mainly from the perspective of exploration of the diversity of black diaspora experiences. Among the four stories in the novel, "Crossing the River" is an exception in the sense that the hero is a slave ship captain. But this story gives light to the era when slave trade was a respectable and profitable trade and Africans as human beings had no presence in the consciousness of the British general public due to deep-rooted racism. It is from this perspective in the "Crossing the River" that we can really understand the significance of the rest of the three stories whose common denominator was black heroes and heroines' search for freedom and love. But otherwise, their experiences are quite different from each other and far apart in time. Therefore lies the necessity for the close reading and interpretation of the each text as an relatively independent piece of work with historically unique characters.

The uniqueness of the hero of "Pagan Coast" is that Nash, a black Christian missionary to Liberia, suspend his belief in Christianity and decides to live the life of the Africans, thus undermining the superiority of American ways of life and Christian civilization.

The heroin of "West" is unique in the sense that Martha May, an old black woman is part of the 'colored pioneers' looking for freedom and love in California after the Civil War. Although her dream for meeting her lost daughter again in California is frustrated by her death in Colorado, her inner life is resurrected from obscurity and namelessness to readers' mind as something precious and beautiful.

"Somewhere in England" deals with a love affair between a black American soldier and a white British woman during World War II. The uniqueness of the story comes from the fact that it is depicted from the perspective of the woman. And the narrative reveals the provinciality and narrowness of the people in the countryside in Britain and the consequent social isolation of an intelligent, broad-minded and proud white woman.

(KATO, Tsunehiko 本学部教授)